教組米沢
Newsletter

米沢市教職員組合

〒992-0039 米沢市門東町 2－3－27
米沢教育と文化の会館
TEL (0238) 23－1542
FAX (0238) 23－1560
HP : https://yonezawa-tu.jp/
Mail : ytuandztu@lemon.plala.or.jp

2023 年 8 月 19 日 第 33 号

子どもたちと“平和”を語ろう

ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下から 78 年目の夏を迎えました。

ウクライナを侵略したロシアは、核兵器のおどしをかけながら世界から孤立しています。一方、核兵器保有国は、以前として「核抑止論」にしがみつき、日本政府も唯一の戦争被爆国でありながらアメリカの核の傘のもと、国連で採択された核兵器禁止条約への参加を「拒否」しています。

戦争中、戦争に協力して多くの教え子を戦場に送った教師たちは、戦後その痛苦の経験から教職員組合を結成し、「教え子を再び戦場に送るな」の旗をかかげ、平和教育をすすめてきました。

今を生きる私たち現職教師も、毎日目の回るような忙しさであっても、子どもたちの未来のために平和を語ることは、決してやめてはいけないことではないでしょうか。

全教の仲間の実践紹介

全国の全教の仲間も、多様な平和教育に取り組んでいます。未来をひらく教育のつどい（全国教研）や全教の機関誌「クレスコ」などで紹介された、平和教育の実践をいくつか紹介します。

共感を生む表現活動で平和の土台を

岩田彦太郎先生（埼玉県・中学校）は、コロナの休校明けの生徒の様子にとまどいました。６月に学校は再開されたものの、授業では話し合い活動が禁止、学校行事も軒並み中止になり、なにかと「自粛」を強いられる生徒たちにどう前向きな活動をさせるか、学年団で話し合い、表現活動を通してお互いが関わり合う活動に取り組むことになりました。

まずは SDGs について個人で調べ、新聞形式で発表する活動から始まり、2 学期には学年行事で「表現活動発表会」を開催し、グループごとにスライド発表やダンスなど、多様な活動を展開しました。

翌年は、夏休みに「戦争体験の聞き取り」を課題にしました。しかし以前とは違い、身近に体験者がいない生徒が多かったため、親世代からの又聞きや NHK のアーカイブスの利用など、どんな方法でもよいことにしました。2 学期の表現活動発表会では、単なる発表ではなく聞き取りで学んだことをアート作品にして、みんなで鑑賞することにしました。

岩田先生は、「生徒はコロナ禍で、お互いに関わりを深めることのできないもどかしさや、仲間と協同する充実感を味わえないつまらなさを感じていた。生徒が表現者となるには、自分の言葉で「伝えたい」という思いが芽生えることが必要です。戦争と平和について考えることで、生徒の中にその芽生えが生み出されたと思います。学校が、生徒同士の人間的な共感を生む場として機能することも、平和の土台のひとつだと思います。」と語っています。

体育館に展示されたアート作品を鑑賞し合う生徒たち（2021年）

【クレスコ・2023 年 8 月号】

世界はつながっていて、自分は無力ではない

堀江理沙先生（東京都・小学校）は、家庭科での 2 年間の学びを報告しています。

「世界の食の課題」の題材では、世界の穀物生産量は全人口に供給できる量があるのに、なぜ飢餓や栄養不足が起きるのか、の問題意識を設定し、様々な資料から大きな原因として「フードロス」の問題があることに気づかせました。そして日本だけで国際食糧援助の総量の 2 倍以上もフードロスが発生していることから、子どもたちに自分たちの問題として原因や対策を考えさせる授業を行い、世界と自分とのつながりを考えさせました。

堀江先生は 2 年間の家庭科の授業で、様々な題材で世界と日本のつながりや、自分が社会とつながっていることを学ぶ実践を続けています。

「コロナとわたしたちのくらし」では、自分や家族の生活の変化やマスク不足の現状から、日本だけでは生きていけないことを実感させたり、「バッグづくり」の授業では単に制作するだけでなく、制作の過程で原料（第 1 次産業）、ミシン（第 2 次産業）から「生産・加工・消費」を実感させたり、6 年生から 5 年生に 1 対 1 でミシンの技術を伝える会を開いて、上級生に自分の成長への自信を持たせたりしています。

【2022 年未来をひらく教育のつどい・平和と国際連帯の教育分科会】

この空から原子爆弾が投下されていたら……

小倉にある「長崎の鐘」

北九州市の小倉は、原爆の最初の標的であり、当日は視界不良だったため、当日に長崎に目標が変更されました。そのため小倉には長崎原爆の犠牲者を悼む「長崎の鐘」の碑が建ち、毎年８月９日には慰霊の式典も行われています。

原川悦里子先生（北九州市・小学校）は、この慰霊碑がある公園に隣接する小学校の先生です。小倉が原爆の標的になったのは、小倉に西日本最大の兵器工場（小倉陸軍造兵廠）があったためですが、多くの子どもたちはこのことを知りませんでした。そこで兵器工場の跡地の見学や、子どもたちの居住地にも残る戦跡を知る学習から始めました。

その後、道徳の郷土資料にも掲載されている「長崎の鐘」の学習、国語の平和教材、総合学習での戦争と平和の学習などで学習を深め、グループごとにテーマを決めて学級内で発表会を開きました。多くの子どもたちが自分たちにできることとして、「自分が学んだことを伝えていくこと」「相手の考えをよく聞くこと」「多くの人に伝えられるように、しっかりと覚えておく」などを挙げていました。

原川先生は、「身近にある戦争の歴史も、あえて扱わなければ時代とともに風化してしまうことを強く感じた。この取り組みのあと、ロシアのウクライナ侵攻が起き、子どもたちにとって外国とはいえ戦争が現実に起きる事態となった。学習では「戦争は二度としてはならない」と子どもたちは感想を述べていたが、大人たちは「国を守るためには強い軍隊が必要」と言う。憲法改正が声高に叫ばれる今、平和教育はどこまで子どもたちに迫れるのか、改めて考えさせられる。」と話しています。

【2022 年未来をひらく教育のつどい・平和と国際連帯の教育分科会】

絵本「へいわってすてきだね」を読む

山林哲先生（大阪府・小学校）は、特別支援学級の担任です。

毎朝教室に行くと、いつも子どもたちが隠れていて、「どこだ、どこだー」と探すのが日課になっていましたが、この日は子どもたちをきちんと座らせ、「きょうはみんなと大事な話がしたい。何の話だと思う？」と聞くと、「戦争の話です」とまっすぐ先生の顔を見たそうです。ロシアがウクライナに侵攻した翌週の月曜日の朝でした。

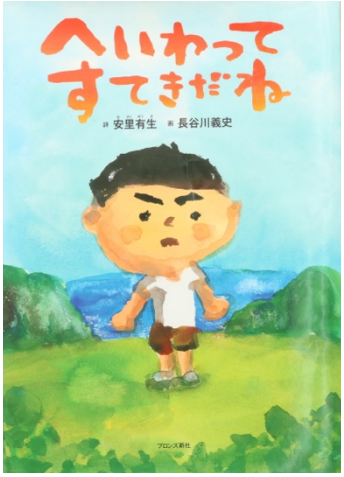
特別支援学級は、なかなか集団で学び合うイメージができない地域性があったそうですが、山先生はこれまでも、「関わり合い、意見を交わせる学級づくり」に意識的に取り組んできました。また戦争と平和の学習は、怖いイメージではなく大事なこととして子どもたちに伝えようとしました。

平和の絵本を教室に置き、読み聞かせも行なってきました。

ウクライナ戦争は、特別支援学級の子どもたちもニュースで知っていましたが、最初の反応は、「プーチンは悪いやつだ」「みんなでやっつけよう」というものでした。先生は「確かに攻め込むのは悪い。でも何で攻め込んだんだろう」と投げかけ、話し合いを促しました。

いろいろな意見を整理する中で、「ふだんから戦争の準備をしていると、攻撃されるかもしれない」「武器を持っていると安心かな」「相手はどう考えるんだろう」と話は深まります。話し合いのあと、また絵本「へいわってすてきだね」を読みました。

絵日記の時間、隼人くん（仮名）は「３ 月の自分の誕生日まで戦争が終わってほしい」と書きました。それは「隼人くんの平和への切実な願いだ」と先生は感じたそうです。



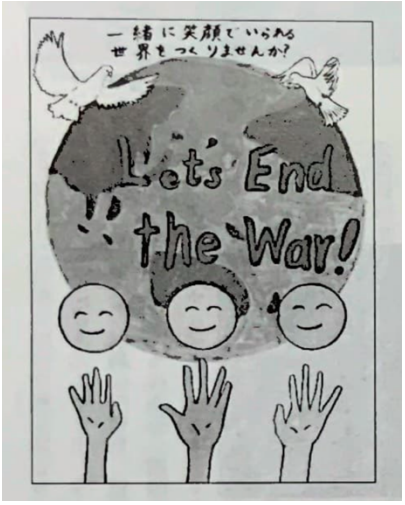
詩： 安里 有生
画： 長谷川 義史
ブロンズ新社　刊

【クレスコ・2022 年 8 月号】

動き出した子どもたち ～ ピースメッセージ

井村花子先生（埼玉県・中学校）は、中学校１年生の社会科を担当していた２月、ウクライナ戦争が始まり、１時間だけ生徒といっしょに考える時間を設けました。生徒たちは、この１時間だけの学習の翌日、「戦争をやめるようにポスターやメッセージをつくりたい」と相談してきたそうです。先生自身はこの戦争に無力感を感じていたそうですが、この生徒たちの提案に勇気づけられ、校長にも相談して生徒会での取り組みが始まりました。

生徒たちは昇降口前で仲間たちに「ピースメッセージ」を呼びかけ、集まったメッセージとポスターに手紙を添えて、ウクライナ大使館に送りました。



井村先生は、２ 年生からの歴史の学習でも、戦争の現実や、日本の戦争と加害の教材研究にしっかりと向き合う覚悟が先生自身に生まれたと振り返ります。その理由は２つあり、共に学んだ時間は生徒の心に届くと信じることができたこと、もう一つは、非常事態に直面したとき、人々の心に「戦闘的な衝動」が沸き上がることに改めて恐怖を感じたからだと言います。この衝動が悲しい歴史につながった過去を学ぶ社会科の授業を、生徒とともに創っていきたいと語ります。

【クレスコ・2022 年 8 月号】

被爆 78 年の平和祈念式典

広島市長、広島県知事、長崎市長がそろって

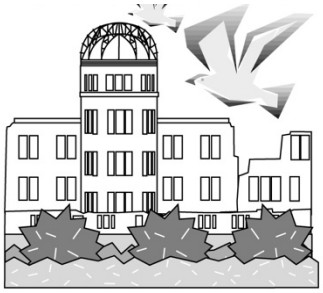
「核抑止論」を厳しく批判

広島・長崎への原爆投下から 78 年。８月６日に広島で、９日に長崎で平和祈念式典が行われ、広島市長、広島県知事、長崎市長はそろって日本政府・岸田政権の「核抑止論」、さらに G7 サミットでも「核抑止が必要」「核兵器廃止は究極の目標」と合意したことを厳しく批判しました。

岸田首相は挨拶で、広島出身であるにもかかわらず、G7 の成果を強調し、アメリカの核の傘のもとで「核抑止論」にしがみつく姿勢を恥じることなく述べました。

世界中の指導者は、核抑止論は破綻しているということを直視すべきです。日本政府には、一刻も早く核兵器禁止条約の締約国となり、核兵器廃絶に向けた議論の共通基盤の形成に尽力するために、まずは本年１１月に開催される第２回締約国会議にオブザーバー参加していただきたい。

松井一實・広島市長



私は、核抑止論者に問いたい。あなたは、今この瞬間も命を落としている無辜（むこ）のウクライナの市民に対し、責任を負えるのですか。あなたは、万が一核抑止が破綻（はたん）した場合、全人類の命、場合によっては地球上の全ての生命に対し、責任を負えるのですか。

湯崎英彦・広島県知事

鈴木史朗・長崎市長

核保有国と核の傘の下にいる国のリーダーに訴えます。今こそ、核抑止への依存からの脱却を勇気を持って決断すべきです。人間を中心に据えた安全保障の考えのもと、対決ではなく対話によって核兵器廃絶への道を着実に歩むよう求めます。

広島平和祈念式典でのこども代表　「平和への誓い」

みなさんにとって「平和」とは何ですか。
争いや戦争がないこと。
差別をせず、違いを認め合うこと。
悪口を言ったり、けんかをしたりせず、
みんなが笑顔になれること。
身近なところにも、たくさんの平和があります。

昭和２０年（１９４５年）８月６日　午前８時１５分。
耳をさくような爆音、肌が焼けるほどの熱。
皮膚が垂れ下がり、血だらけとなって川面に浮かぶ死体。
子どもの名前を呼び、「目を開けて。目を開けて。」と、叫び続ける母親。
たった一発の爆弾により、一瞬にして広島のまちは破壊され、悲しみで埋め尽くされました。

「なぜ、自分は生き残ったのか。」
仲間を失った私の曾祖父は、そう言って自分を責めました。
原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、
生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。

あれから７８年が経ちました。
今の広島は、緑豊かで笑顔あふれるまちとなりました。
「生き残ってくれてありがとう」
命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。

私たちにもできることがあります。
自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること。
友だちのよいところを見つけること。
みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。

今、平和への思いを一つにするときです。
被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。
身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。
誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます。

令和５年(２０２３年)８月６日

こども代表　広島市立牛田小学校６年　勝岡 英玲奈（かつおか えれな）
広島市立五日市東小学校６年　米廣 朋留　（よねひろ ともる）